

車の中に泣き声が響き渡っていた。私は当時六歳、岐阜市から母の故郷神岡町へと転校した。とにかく岐阜市を離れたくなかった。岐阜市には、遊べる場所がたくさんあった。心から笑い合える友達がいた。だから、辛くて辛くて泣きわめいていた。

「あーなにもない。」神岡に着いたときの第一印象はそれだった。それでも神岡へは、何回も来たことはあった。だが、これからずっとここで暮らしていくと思うと、悪いところばかりが目についてしまう。遊び場所も少ない。当たり前だが、友達もまだ一人だっていない。岐阜市のこと忘れられず毎晩のように泣いていた。引越してしばらくし、保育園へ通うことになった。また一からのスタートだと思うとどうしてもやる気がでなかった。保育園に通い始めた頃の私はものすごく暗かったと思う。

そんなある日、隣の席だった女の子が話しかけてくれた。給食の準備の仕方が分からなくて困っている私に気が付いたのだろう。私は、心が温かくなった。その事を機に、私はもっと違う「神岡」を見るようになった。すると、今までは何気なく交わっていた挨拶も、当たり前ではないことに気がついた。毎朝、「おはよう」と声をかけてくれる近所の方。「おかえり」と温かく出迎えてくれる祖父母。どれも、神岡ならではの良きところだと思った。すると、それまで不便だと思っていた「商店の少なさも気にならなくなった。商店にしろ、住む人にしろ、多ければいいというわけではない。大切なのは、地域との関わりの濃さ、深さではないか。

私は全校生徒の名前と顔を覚えていた。毎朝、校門で、相手の名前を付けて「〇〇さん、おはよう」「陽菜さん、おはよう」と挨拶を交わす。互いを知ること、相手からの何気ない一言に喜びを感じる。人と人との関わりが深ければ、誰もが安心し、心温かく毎日を過ごせる。そんな温かなふるさとを大切に、私は神岡で暮らしていく。